

宗教研究における 国際協力の功罪

L. E. サリヴァン
Lawrence E. SULLIVAN

私の発表がもっと国際的なものであれば、このシンポジウムの論題としてよりふさわしいのだろうが、実際にはそれほど国際的な視野のものではないことをお詫びしたいと思う。宗教研究においては今日、世界中で国際協力が実現しており、そうした協同研究について調べておけば、情報としてはより有益なものとなっただろう。現実には私はそのような調査は行っていないので、別のアプローチをとっていた方がこの会議によりふさわしく、お集まりの皆さんにとっていっそう興味深いとお考えになられたとすれば、申し訳なく感じる次第である。代わりに私が選んだのは、過去10年間、ハーヴァード大学の私が勤めてきた機関において、どちらかといえば個人的に経験してきた事々について振り返ってみることであった。私が検討することを求められた問題について探究を進める上で、こうした事例にも価値があることを私は望んでいる。なお、このシンポジウムにご招待いただいたことに、そして特に南山大学の皆さんの歓待に感謝を申し上げたい。

ハーヴァード大学の私自身の所属機関、世界宗教研究センターでの経験についてお話ししたいと考えたのは、その設立が宗教研究における国際協力への取り組みを目的としていたからである。こうした目的は、本会議の主催者が私に評価を求めてきた論題にほかならない。

国際的な協同研究のいくつかの功罪について理解を深めるために、ここでは最初にセンターの始まりについて概観し、次いで所長としての私自身の経験から3つの事例を取り上げることにする。

世界宗教研究センターがハーヴァード大学に設立されたのは1958年である。その設立は、前年1957年に学外の複数の方々から匿名で巨額の寄付金が寄せられ、それに応えてのことであった。寄付をされた方々より先に、大学教授会がセンターの設立を思いついたわけではまっただけでなかった。こうした学外に起因する由来は、以下で言及するいくつかの帰結を生むことになる。寄付をされた後援者の方々は国際協力を通じて、センター設立という考えを展開していった。彼らはニューヨーク市のキリスト教信徒の方々に、世界の諸宗教について学ぶことを楽しみとしていた。彼らはオックスフォード大学の宗教学スボールディング・プロフェッサー、ラーダクリシュナン教授の諸宗教に関する研究に感銘を受けており、イギリスに渡って同教授から助言を得ることで、センターについての考えを深めていった。彼らは1960年にハーヴァードでのセンター開設式典に、教授を招待しスピーチを依頼した。当時、ラーダクリシュナン教授はオックスフォードを離れて祖国インドに戻っており、やがてインド大統領に選ばれることになる。ラーダクリシュナンはハーヴァードの世界宗教研究センターでのスピーチで、いかに困難であろうとも国際協力を続けるようにと私たちを励ましてくれたのだ。

1957年に選出された初代所長は、カナダ出身のロバート・スレイター教授である。スレイターは第二次世界大戦中、英軍で国教会の従軍チャプレンを務めた。実は彼は日本軍に捉えられ、ビルマの捕虜収容所に抑留されていた。その間に仏教への関心を

深めたスレイターは、戦後、コロンビア大学で仏教学を専攻して博士号を取得し、その後、カナダのマギル大学で教えるようになっていた。センターの後援者の方々がハーヴァードの新しい研究センターの所長への就任要請を行った時、スレイターは彼らにかつての困難な時期にしたためていた書き物を見せた。そこに記されていたのは、いつの日にか、単一大学の狭い垣根を越えて国際的な協力と理解を促すことのできる機関、「超 - 大学 (スーパー・ユニバーシティ)」を設立したいという、彼の希望だった。彼はとりわけ、そうした機関では、世界のさまざまな文化における人間の心の中の、最も深い動機を研究することが必要だと感じた。多様な文化の宗教心に根ざしたさまざまな視点を理解することによって、初めて世界平和のための強固な礎石を据えることができるのだと彼は論じたのである。こうして国際協力の中で探求される価値が、最も高次の位置を占めることになった。それがすなわち世界の諸民族、諸国民の間での、相互理解の促進と平和の達成である。

初代所長に就任した時に、スレイターはセンターの研究員（フェロー）たちは世界中の多様な文化を背景とし、同じ場所で研究し共同生活を行うべきであると説いた。後援者と大学からの協力を得て、スレイターは彼の構想に対する国際的な協力を得るために、世界各地に出向いた。彼の訪問先には日本の皇室も含まれており、そこではスレイターの努力に協力支援する旨の確約を得ることもできた。

彼が連絡をとった世界中の研究者たちは、1959年に大学から離れた小さな貸し家

で初めて会することになる。仏教を研究し独身生活を送っていた僧侶もいれば、幼い子どもがいる家庭をもつ大学教授もいた。さまざまな食事を供するために使用できるキッチンが、1箇所だけであり、お好みのレシピに合わせ、ジャイナ教徒、ユダヤ教徒、ムスリム、仏教徒たちの多様な宗教食の規定を満たすことは不可能であった。そこで個別のキッチン付きアパートを備えた新たなホームの建設が、ただちに決定されたのである。こうして20戸の住居と21箇所のキッチンを備えた私たちのセンターの建物が、大学キャンパスに建造されたのだった。私たちは自分たちの住居をもつ、ハーヴァードで唯一の研究センターになっている。

各国からの研究者たちは、食事だけではなく多種多様な学問のスタイルも持ち込むことになった。何年にもわたってヨーガの実践に沈潜している敬虔なグルもいれば、古代の聖典やその他の特別な言葉をせりふのように暗唱することに没頭している文献学者もいた。信心深く詠唱や祈祷を毎日実践し続けた信仰者もいた。こうした人々は、学者としてのスーツの代わりに出身文化の衣類、装束を身にまとうこともしばしばだった。1950年代のアメリカでは、こうした人目を引く異国風の振る舞いが、センターの外にある大学にはある印象を植え付けることになる。センター設立の考えはそもそも学外に由来するものだったので、センターで実践されているような国際協力は、一部の教授陣からは容易には理解を得られず、受け入れられることもなかったのである。センターで行われている目を引く多様な慣習には、教室や講堂で示される学問のスタ

イル、街で着用される宗教的な衣装、扉の開け方や挨拶の仕方にまで影響するさまざまな行動規定が含まれていた。これらを見てハーヴァードの教授たちの中には、賢明にもセンターを「神のモーテル」と呼ぶ者もいた。あるいはセンターの国際的な相貌に対していっそう批判的な言葉が使われて、「神の動物園」と呼ばれることもあった。今日でも依然として、こうした呼び名が聞こえてくることがある。一般にはユーモアに富んだ、私たちの意図をよく汲んだ上での発言ではあるけれども。

宗教研究における国際協力の多大な危険の一つとして、依然として所属機関からの疎外、ならびにそこでの誤解がある。そうした機関　大学の教授会や理事会　は、国際協力への理解と支援を続けていくことになるだろうか。とりわけ国際協力のあり方が、国外からの協力者が彼ら自身の文化の独特な作法に従って、自由に行動なり貢献なりができるような真の協同関係であることがわかった場合には、どうだろうか。最も根深い最大の危険は、当該機関自体とそこでの同僚から、国際協力への努力に対して理解と支援がなくなることである。国際協力は資産の無駄遣いであり、所属機関の本来の務めへの関心を逸らさせるものだと感じられることさえあろう。そうした誤解と孤立無援は、大学ならびに学術機関を成り立たせる活力と会話からの排除という否定的な結末をもたらすものである。

こうした危険に対処するために、ハーヴァードの世界宗教研究センターの所長たちは、国際協力と大学の中心的な使命　世界における生の理解という使命　との間

にあるつながりを、事あるごとに具体的に示すことが必要だと考えてきた。ハーヴァードの多くの寛大な教授たちは、長年にわたりこうしたメッセージに応えてくれている。現在、ハーヴァード大学のすべての学部および課程から、国際的な経験をもつ約50名の教授たちが、5部門からなる研究センター評議員会の委員の任に当たっている。その5部門とは、自然科学、人文系諸学、社会科学、芸術、そして〔神学・法学・医学の〕専門職養成部門である。

ここで現在、世界宗教研究センターが関わっている3つの国際協力について、簡単に述べさせていただきたい。それらは大学教授陣と世界中の専門家から寛大な協力を得て行われているものである。この3つの事例は、国際協力のその他の功罪を明確に説明する上で役立つだろう。

センターの協同プロジェクトはすべて、同時に3つの目標を遂行することを目指さなければならない。

第一に協同プロジェクトは、国際的な規模の複合領域的な研究に基づいて、緊密に企画運営された協同作業を必要とする独創的な研究を遂行しなければならない。

第二に、そうした新たな研究の成果を教授するための、新しい教育方法の導入を構想しなければならない。

第三に、当該研究が今日の世界の目の前の現実問題に対して、積極的な影響を与えることができるような応用法を提示しなければならない。

最初の例としては、センターが1995年以来、企画運営を行っている「世界の諸宗教とエコロジー」に関するプロジェクトがあ

る。このプロジェクトは、80ほどの国々の1000名以上の研究者から協力を得ている。プロジェクトの発足以来、国外の全研究者がセンターに招かれ、それぞれに面識を得、協同作業を行ってきた。彼らの専門分野は多岐にわたる。文化史家、宗教的指導者、生態学者、政策アナリスト、宗教史学者、人類学者、環境保護の活動家、政府の閣僚等々である。彼らは一連の研究会議で対面した。こうしたプロジェクトには、世界中の諸機関、すなわち支援を惜しまない大学・学会、先住民族の連帯機関、政府機関や非政府機関、宗教団体や慈善事業を行う財団との協力関係が不可欠である。1998年10月、最後の会議がニューヨーク市において数日間にわたり開催された。期間中、自然史博物館に1700名の参加者が集まり、私たちが行っている宗教的探究が科学者、教育者に対してもっている含意について議論する日があったり、国連本部に参集して、私たちの探究をビジネスや公共政策の世界にどのように応用するのが最善かを集中的に取り上げる日があったりした。その成果は、センターから10巻のシリーズとして刊行されつつある。そのうち仏教とエコロジー、儒教とエコロジーに関する巻はすでに出版されている。こうした国際的な協同研究には大きな価値がある。地域的、地球的の両方の規模においてさまざまな環境問題がもっている宗教的な根源に新たな洞察を得ることにもなり、緊急の課題に対して新たな独創的な対応を生み出す刺激にもなるからである。

他方、そこにはまた大きな危険もある。このプロジェクトから生じている2つの危険

について指摘しておこう。

第一に、信頼が得られない危険がある。あるプロジェクトが文化や学問分野を横断して広範囲に広がる場合には、信頼性が失われる危険が生れるのである。たとえば、最新の環境科学の最良の成果は含まれることになるだろうか。宗教学者にも最良の科学研究を認識し理解するのが可能だということを、科学者たちは信じるだろうか。アフリカ、中央アジア、ボルネオの先住民の人々は、彼らの宗教的信念と環境への配慮が、イスラームやキリスト教といったいわゆる世界宗教の「大伝統」と比較しても遜色のない注目を受けるだろうということを感じるだろうか。国際的、学際的な多様な見方を信頼性を保ったまま組み入れて伝達することがもてできなければ、このプロジェクトは偏った致命的な欠陥をもつものだと見なされ、その成果は歪んだもの、信頼しえないものと見られることになる。こうした危険を乗り越えるために、プロジェクトの国際的、学際的な視野は、当初から周到に計画されていなければならない。次いで、異なる見方、対立する見方を戦略的に選択、特定し、プロジェクト開始の時点から全範囲にわたって参加してもらえるように最も信頼しうる専門家たちに協力を仰がなければならない。企画に上がった多様な分野のすべてから、傑出した指導者や機関からの支援や参加を得ることができないことが計画段階で判明したとすれば、そのプロジェクトは断念すべきものだったのだろう。

エコロジー・プロジェクトで明らかになった第二の危険は、公共政策上の何らかの

立場を支持するように、私たちの研究教育の努力が御用学者の役割に成り下がってしまう危険である。私たちは一方で、今日の重要な諸問題に対峙する国際協力に参加したいと願ってはいる。しかしながら他方、エコロジーなどの問題は、すでに熱のこもった公の論戦の中で強固に支持されたいくつかの視点へと分裂している。地球温暖化防止京都会議がその実例である。私たちの国際協同研究が政策として応用されることは望ましいが、私たちの努力の全体が、さまざまな陣営　それは私たちの協力者のことさえある　によって唱えられる特定の政策上の立場に吸収されることは望むところではない。そうした危険を乗り越えるために私たち自身がたえず想起し、協力者たちにも喚起しているのは、私たちの仕事の基調は大学における研究教育のそれから得ているということである。プロジェクトが政策を扱う場合であっても、私たちが指針を得るのは、大学の各専門学部と、それらの学部出身の教授陣からなるセンターの評議員からである。最先端の研究を、医学、法律、公衆衛生、行政といった専門職の実践に応用できるように人々を訓練しているのが彼らである。したがって私たちがもつ政策との関係は、さまざまな政策の諸前提と予測しうる諸帰結の、分析、解明、評価ということになる。私たちの協力者には、特定の政策を唱えたり公共の領域でその実現のための働きかけを行ったりすることが私たちの役割なのではないということ、最初から理解してもらっている。

現在行われている国際協力プロジェクト

の二つ目のものとして私が述べたいは、世界宗教博物館の計画である。私たちのセンターは、ニューヨークの建築家・博物館設計者で、最近ではワシントンD.C.のホロコースト記念博物館を完成したラルフ・エイペルバウムと作業を進めている。世界宗教博物館は、5万平方フィートほどの展示スペースをもち、管見ではこの種の唯一の博物館となるはずである。この博物館は、ある仏教団体の要請によって台北に建設されていることから、すぐれて国際的な協同作業と言える。博物館のコンセプトを立てて展示内容の具体化を行うように求められたのが、私たちのセンターだった。このプロジェクトには、哲学や美学から資材を用いた設計や建築に至るまで、多くの次元の研究が含まれている。この博物館は公共的な学習施設となるはずである。私たちは展示内容とともに、そこで行われるであろう教育の過程についても開発を求められている。

すでにセンターには、専門分野、出身国、宗教伝統を異にする十数名の研究者からなる研究チームが招集されている。彼らの協力によって、芸術家、博物館長、学芸員、美術史家、映像作家、建築家、宗教的指導者を含む国際的なネットワークを築くことができている。このプロジェクトの射程は広大である。たとえば私たちは一方で、1998年2月にはインドはダラムサラのダライ・ラマの居住地で、12月にはネパールのルンビニで開催された仏教徒サミットでこのプロジェクトについて話し合い、他方、1999年7月までの間に、ワシントンのスミソニアン、シカゴのアート・インスティテュート、サンフランシスコ近代美術館、フ

イラデルフィア芸術大学などの北米の主要な博物館において、各国から招いた宗教芸術の主要な専門家120名とともに6回の諮問会議を開催してきた。

こうした国際協力は取り組むに値するものであり、その価値は博物館の役割の中にも明確に述べられている。すなわち世界の多様な民族、国民の間で、宗教的に異なる動機や伝統への理解を深めることによって、平和と愛という大義をさらに高く掲げてゆくということである。このプロジェクトを脅かす原理的な危険は、「代行/表象の政治性」と呼ばれるものと関係がある。いったい誰に「他者」の代弁ができるのか。博物館のような単一の機関が、いったいいかにして、世界中の多くの信仰や宗教実践を公正に描写できるのだろうか。他者の宗教生活を誤って表象することによって、さらなる誤解と不信を創り出す危険を犯しているのではないか。私たちは皆さんからの助言と提案を歓迎したいと思う

というのも私たちは、こうした危険を乗り越えることにつながるようなプロセスと態度を創り出そうと努めているからである。このプロセスが目指しているのは、世界中から、そして多くの宗教伝統から、洞察と展望が寄せられることを保証することである。そうした協力と助言のプロセスに基づいて、私たちはすべての宗教を網羅的に取り上げるよう努力するのではなく、理解に役立つ事例を選択したいと考えている。また私たちの態度とは、この仕事を聖典様式の権威づけを行う結語としてではなく、注釈様式の解釈の企てとして提起するものである。他者の声を模倣するだけの腹話術師

として振る舞うのではなく、私たちは自分自身の声で語ろうと努めている。それは博物館の声であり、この博物館は、宗教伝統や宗教組織の内部で信仰や実践を教えるダルマの師匠、グル、祭司、霊的指導者の役割を奪い取るのではなく、諸宗教について教える公共の学習施設である。この役割は困難であり、創造的な緊張に満ちている。ここから何か良きものが生まれ出ることを私たちは望んでいる。

国際協力の最後の事例については、まだ予備調査が行われたばかりの段階なので、ごく簡単に触れるだけで済まさなければならぬ。それでもこのプロジェクトは、ここでの文脈からいって言及するに値する刺激的なものである。周知のことだと思いが、1997年末にユネスコの188の加盟国は、世界文化フォーラムの開設という提案を満場一致で承認した。最初のフォーラムはスペインのバルセロナで2004年4月23日から9月24日まで、150日の会期で開催される予定である。(2012年のフォーラム開催地として、東京都が立候補していると私は理解している。)このフォーラムは、文化の豊かさや多様性を称えるただの新種の世界的なイベントというわけではない(国際的に認められた同規模のイベントにオリンピックと万博がある)。このフォーラムが目指しているのは、今日の人類が直面するさまざまな課題に対し、新たな解決策の創出に欠かせない国際的な対話を創り出してゆく、生き生きとした反省の過程となることである。

世界文化フォーラムは、おそらくは「精神のための万博」と説明することもできよう。そこでの呼び物には、いくつものシン

ポジウムや会議、芸術祭、テーマ別の展示が含まれるだろう。そこでの危険は、しばしばあるように、宗教研究とそれを行う諸機関(私たちのセンターのような)が、他の文化的、政治的課題に奉仕するよう道具にされてしまうことである。イベントの規模によって、こうした危険も増大する。したがって、これはきわめて大きな危険である。しかしながら反対の危険の方が、さらに大きいかもしれない。すなわち、そうしたところへ招待されても警戒のあまりにしり込みしてしまうことによって、世界の宗教生活の多様性にしかるべき注意が向けられなくなってしまうかもしれない。こうして地球規模での反省という創造的な過程において、宗教生活の多様性がふさわしい役割を果たさないということも起こりかねないのである。

この発表において私は、宗教研究における国際協力に含まれるいくつかの功罪を指摘してきた。いずれの場合にも危険に対処するために取りうる解決策も指摘してきたつもりである。私たちはこれらの困難にも対峙し、創造的な解決策を見出すように奮い立つべきだと私は信じている。結局のところ、取りうる選択肢は何なのか。小さな危険を避けることで逆に大きな危険を犯すことになれば、宗教研究は地上から姿を消してしまう。国際的な局面を手付かずにしておくと、国際的な協力や理解を促進する上で果たすべき責任ある役割を果たしそびれることになる。私が望むのは、私たちが互いに励ましあって、目の前に現

われている価値ある国際協力へと進んで着手し、私たちが脅かす危険に対処できるように協力しあうことである。それによって私たちは誰しも、人類の幸福を守り育む文

化のために、積極的な貢献ができるようになるだろう。

(翻訳：奥山倫明)